「セメント樽の中の手紙」題材考

――前田河広一郎訳『ジャングル』との関係について――

北川秋雄

一

葉山嘉樹の「セメント樽の中の手紙」は、僅か二五〇〇字前後の短篇小説ながら、葉山のみならず、プロレタリア文学中の傑作とされている。例えば浦西和彦[1]は「この作品には、悲惨な境遇がじめじめとした暗さで表現されているというよりも、一種のロマンティックなみずみずしさがある、屈指の短篇傑作の一つである。」と絶賛している。現に高等学校の国語の教科書にも掲載され、多数の青少年にプロレタリア文学の代表作として読み継がれて来た。上田博[2]は、箱から出て来た〈女工〉の手紙が、松戸与三の内面に変化を齎すことに注目しながら、この二人の労働者は共に〈人間的な願いと現実との相克〉の中にあって、〈対象的世界を科学的方法によって認識するにいたらず、変革的社会集団を背後にもたないすべての抑圧人民〉の一員で、小説末尾の松戸の姿から、〈非情な世界に屹立しながら、その前に立ちすくむ孤立した一人の労働者〉の鮮明な造型化を読み取っている。一方、川端俊英[3]は、与三が手紙によって、〈大きな励まし〉を受け〈自分の苦しみも憤りも女工と共通するものであるという認識〉に立ち、そこから労働者としての〈連帯が広がっていく〉というように、二人の間に〈労働者の連帯〉の可能性を読み取っている。

それにしても、この小説を初めて読んだ後、すこぶる奇妙な違和感を憶えた記憶が私にはある。すなわち、セメント製造の工程中、誤って落下した労働者の死体が、そのままセメントとなって、その経緯を述べた恋人の手紙とともに市中に出回るという衝撃的な出来事について、実際にそのような陰惨な事件が、当時の日本の労働現場に常態としてあったのだろうかという疑問と違和感である。炭鉱

等の坑内爆発事故は措いて、死体を穢れとして忌避しながら、しかし一方で手厚く葬る近代日本人の心性から言って、作り物めいた、非現実的な感じが否めない。当時の労働者がいかに過酷で非人間的な労働を強いられていたとしても、死体の混入した製品をそのまま市場に出すなどということは、およそ非現実的である。混入したセメントを死者として葬るくらいの最小限度の宗教心は、当時の経営者にもあったのではなかろうか。しかし、先行研究の多い中で、この点に関する議論は不思議なことに、今日までなされることがなかった。

ところで、「セメント樽の中の手紙」の題材については、葉山嘉樹が一九二〇年、名古屋セメント会社に勤務していた時の労働者の事故死が元になっているとされて来た。例えば、杉野要吉は、「『セメント樽の中の手紙』と現代――葉山嘉樹の初期短篇をめぐって〈五〉――」[④]において、実際にあった労働者の事故死事件から受けとめた強烈な印象を、〈そのまま事実に即し題材として生かして書いた作品〉として、「セメント樽の中の手紙」と長篇『誰が殺したか?』[⑤]の関連に言及している。杉野要吉は、死んだ村井庄吉という実在の人物を、「セメント樽の中の手紙」では、死んでセメントになった青年と、それを受け取った松戸与三の〈作中の二人の人物に分化させ、作品の図柄を大きく虚構化してこの小説を書いている〉という。さらに、〈労働者村井庄吉の事故死事件を、この小説では虚構に変換させ、一人の労働者の、「人間」であることの証である一切のもの―「骨も、肉も、魂も」のすべてが、クラッシャーの中で「石」や「鋼鉄の弾丸」と一体になって、「細く〳〵、はげしい音に呪の声を叫びながら」、粉々に砕かれて「セメント」になってしまうという、虚構をより究極的に徹底させた鮮烈なイメージで作品に形象化しているが、このようなイメージ形象における鮮烈化の方向性は、これまでにみてきた「牢獄の半日」や「淫売婦」の「人間」造形のイメージともオーバーラップした、この時期の葉山に一貫した幻視の想像力によるものであることも明らかだろう。〉と述べている。杉野要吉は葉山の初期作品に現れる肉体破砕のイメージに注目した先行研究として、平岡敏夫「肉体破砕のイメージ――葉山嘉樹論――」[⑥]を上げながら、この時期の葉山の〈幻視〉として、その独創性を高く評価している。

ところで『誰が殺したか?』では、転落後の村井庄吉が、洞内で、焼けた灰の中、苦悩、煩悶する様、さらには仲間に救出されて入院、三日後に絶命することが語られている。作中人物の村井庄吉は、ロータリーキルンの故障修理のため、内部に入り、ハンマーを振るっていたが、誤って焼けた灰の沈んでいる沈塵室へ足を滑らせて落ちる。しかしながら、「セメント樽の中の手紙」のように、転落後、

瞬時にして肉体が破砕され、セメントになるという場面はない。またロータリーキルンは、回転窯とも言われ、粒状・粉状の物体の焼成、灼熱に用いられる窯であって、塊状の固体等の破砕の機能を有するものではない。杉野要吉の言うように、それは果たして葉山嘉樹の〈幻視の想像力〉であったのだろうか。「セメント樽の中の手紙」の身体破砕と、経営者による隠蔽の結果の商品出荷という、日本的心性にそぐわない陰惨なイメージ造型には、実は種本があったと思われる。

二

UPTON SINCLAIR "THE JUNGLE"は、当初"THE JUNGLE STORY OF CHICAGO"と題して、一九〇五年にCIRARD KAN社から刊行された。[7] アプトン・シンクレア（一八七八～一九六八）は、アメリカの労働運動を描いた先輩作家として、日本のプロレタリア文学者の間では、当時よく知られていた。たとえば、一九二七年には、結果として禁止処分になるが、村山知義の演出で前衛座が「プリンス・ハーゲン」などの上演を試みている。拙稿は葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」とシンクレアの『ジャングル』の影響関係、厳密に言えば、前田河広一郎訳で、一九二五年十二月二日に牛込区神楽町叢文閣から刊行された単行本『ジヤングル』との関係について論じるものである。

前田河広一郎は、翻訳にあたって、〈今から十五年ばかり前に、シカゴにゐる時分、その頃売り出しのシンクレエアの『ジヤングル』を一人の猶太人の女学生の友達が、自分に一読することを強請したのであつたが、何とかした加減からつい読まずにしまつたことがある。十五年後の今日、一と晩で読んでしまつて、惚れ込んで、一気に約一ヶ月ばかりで翻訳し終つたことも、その時のせめてもの埋め合せになれかし、と思つた次第である。[8]〉と述べている。シンクレアは、今年四七歳で、〈『シンクレエア公債計画』という奇抜な借金方法を案出して、世界の読者から幾何なりとも応募者をつのつてゐる。十弗を最低として、それを払い込めば毎年五弗宛の彼れの著書を受取り、他の五弗は彼れの負債として保有され、順繰に新旧の自著で支払はれる。〉〈壮年の意気旺んなアメリカ切つてのコムミニスト[9]〉である。〈不思議と、シンクレエアと同じ仲間の集会や何かに出て居つた自分は、まだシンクレエアとは直接会つたことがない。現に『ジヤングル』の中へ出て来る、二三のそれらしい社会主義者は自分も知つてゐる同僚であるが、何かのはずみでかけちがつて会はずにしまつたことは遺憾である。それにしても、自分の日常目撃――肱を触れてゐた人々が、この偉大な作物の中に躍動してゐるのを見、自分もぼろ靴を重く曳摺つたホルステッド街の如きがそ

つくりそのまま描出されてゐるのを読むと、堪らない懐かしさがこみあげて来る。[10]〉と述べている。

さらに、一九二五年十月十二日付の「原著者の訳者に与えし書」というアプトン・シンクレエアの訳者宛の手紙が掲載されている。それに拠れば、一九二一年二月十二日に『ジヤングル』の翻訳出版権を、〈東京、日比谷公園、国際通信社宛ヤソタロウ・モウリといふ人に差上げたことになつてゐますが、その人からは二度と何も云つて参りません。[11]〉ので、前田河広一郎に〈向ふ五ヶ年間に限り、欣んでその権利を差上げます。[12]〉と述べている。前田河広一郎の翻訳原本がどの版に拠るものか、俄かには特定しえない。一九二〇年に PASADENA, CAL の UPTON SINCLAIR 社、CIRARD, KAN の HALDEMAN JULIUS 社、NEWYORK の VAN-GUARD PRESS 社から刊行されたものがある。前田河広一郎は、〈シンクレエア公債計画〉なる販売方法を紹介し、シンクレアも一一年に〈ヤソタロウ・モウリ〉という人物に翻訳出版権を譲ったとあることから、UPTON SINCLAIR 社刊行の物を原本であると考えるのが妥当であろう。拙稿は、この本も併せて参照した。

この小説は、アメリカのシカゴにある世界一の屠殺場ストックヤードにリトアニアから移住して来た二家族の転変の様を、到着直後から語り始める。ヨウリスと両親と従姉、ヨウリスの許婚のオーナと兄の、二家族である。ヨウリスは二十年間リトアニアの森の中に住んでいたが、アメリカでの一攫千金を夢見て、家族と許婚を引き連れ、シカゴに遣って来る。ヨウリスが、一日四〇〇〇頭分の牛を処分する屠殺場街の三年間の生活を経て、最終的に社会主義に目覚めるまでを描いている。ヨウリスは当初、シカゴの屠殺場街ストックヤードにあるダルハム社の肥料工場やブラオン社屠殺床清掃などの、下級労働者として雇われる。しかし、悪徳業者に騙され、有り金を叩いて持ち家を買い、借金を背負った上に、怪我で失業する。やむを得ず、老身に鞭打って働きに出た老父も、仕事場の劣悪な環境のため、忽ちのうちに肺結核で死亡し、親方にヤードでの一家の仕事口を奪うと脅かされた妻も、肉体を弄ばれる。怒りに狂ったヨウリスは、親方を傷つけ、傷害事件で入獄する。出獄後に、妻は出産で死に、赤ん坊も死ぬ。その上、長男も事故で亡くす。時あたかも一九〇四年、一大不況下のアメリカでは、工場閉鎖が続出し、一五〇万人の失業者を出す。ヨウリスは一家を捨て、放浪の末、物乞いに身を落とし、従姉は売春をして一家を養う。ヨウリスは最終的に社会党の州幹事をしているホテルの経営者のもとで、掃除など下働きの仕事に就きながら、それ以降、八年間めざましい党活動を展開するに至る。彼は、社会主義の学習を通して、シカゴでの過酷で非人間的な労働生活が、ビーフ・トラストによる搾取の結果である

ことを知る。このように、『ジャングル』は、労働者の社会主義に対する覚醒をテーマにした長編小説である。

さて、『ジャングル』には、ダルハム社の労働現場の過酷な様子を次のように語る場面がある。

Worst of any, however, were the fertilizer-men, and those who served in the cooking-rooms. These people could not be shown to the visitor,—for the odor of a fertilizer-man would scare any ordinary visitor at a hundred yards, and as for the other men, who worked in tank-rooms full of steam, and in some of which there were open vats near the level of the floor, their peculiar trouble was that they fell into the vats; and when they were fished out, there was never enough of them left to be worth exhibiting,—sometimes they would be overlooked for days, till all but the bones of them had gone out to the world as Durham's Pure Leaf Lard[13]!

When, for instance, a man had fallen into one of the rendering tanks and had been made into pure leaf lard and peerless fertilizer, there was no use letting the fact out and making his family unhappy.[14]

前田河広一郎訳『ジャングル』では次のように翻訳されている。

一番悪いのは肥料室と料理部屋に働いてゐる人間であつた。これ等は来観者には公開されない部屋であつた。——肥料室の労働者の悪臭は優に百ヤードぐらゐの距離にある見物人を脅かし、料理部屋と称する湯気の籠つたタンク室で、床と同平面に大きい薬槽が設けられて居る部屋に働いてゐる人間は、ともすればその薬槽に滑り込み、掬ひあげられた時には見る影もない物になつて出て来る恐れがあるので、詰りこの二つは会社によつて開かずの間とされて居たわけである。時に、薬槽に滑り込んだ男は数日の間掬ひ上げられずに、彼れの骸骨以外のものだけが『ダルハムの純粋ラード』として世界に送り出されるまで忘れられてゐることもある[15]！

人間が例のタンクの中へ落ちてしまつてラードと肥料とに化つた後で、会社ではわざとそんなことを報告した上に遺族を悲ませる必要も認めなかつた[16]。

一方、「セメント樽の中の手紙」の事故死は次のように語られている。

——私はNセメント会社の、セメン袋を縫ふ女工です。私の恋人は破砕器へ石を入れることを仕事にしてゐました。そして一〇月の七日の朝、大きな石を入れる時に、その石と一緒に、クラツシヤーの中へ嵌りました。

仲間の人たちは、助け出さうとしましたけれど、水の中へ溺れるやうに、石の下へ私の恋人は沈んで行きました。そして、石と恋人の体とは砕け合つて、赤い細い石になつて、ベルトの上へ落ちました。ベルトは粉砕筒へ入つて行きました。そこで銅鉄(ママ)の弾丸と一緒になつて、細く細く、はげしい音に呪の声を叫びながら、砕かれました。そうして焼かれて、立派にセメントになりました。

骨も、肉も、魂も、粉々になりました。私の恋人の一切はセメントになつてしまいました。

両者を比較すると、誤って落ちた労働者が救助されず、また死体も取り出されず、そのまま製品となって世の中に出て行くという、資本主義社会の労働者が置かれた、残忍かつ過酷な労働形態を極端な形で体現したものとして共通していることが分かる。さらに、経営者の隠蔽によって、ダルハム社のラードはそのまま事情を知らない市民の食卓に上るであろう陰惨さ、恋人の手紙が無ければ、Nセメント会社のセメントは、〈劇場の廊下になつたり、大きを邸宅(ママ)の塀になつたりする〉であろう陰惨さがある。そして、このタンクに落ちた労働者がそのままラードや肥料になって世に送り出されるという酸鼻の極みの話から、葉山嘉樹は、セメントになって市場に出された恋人の話という「セメント樽の中の手紙」を着想したのではないかと思うのである。

三

周知のごとく、大正の末期からプロレタリア文学は分裂解体を重ねており、三・一五事件以降は、ナップ対文芸戦線の対立抗争という形を取った。葉山嘉樹はこの間、一貫して文戦派に属していたが、運動末期には青野末吉との対立から、前田河広一郎、里村欣三らとともにプロレタリア作家クラブを結成している。「セメント樽の中の手紙」執筆当時、葉山嘉樹は前田河広一郎と極めて近い存在であったのである。「セメント樽の中の手紙」は一九二六年一月の『文芸戦線』に発表された。脱稿は二五年一二月四日と、雑誌初出末尾に記されている。そして、前田河広一郎訳『ジヤングル』は、直前の二五年一二月二日に刊行されている。浦西和彦[17]は葉山嘉樹の「びつくりし続ける[18]」の〈『セメント樽の中の手紙』は、一日平九郎(ズボラ)をして木曾で書いた〉という回想をもとに、二五年一二月四日、一気に書き上げられたと推定している。題材として定説になっている名古屋セメント会社における村井庄吉の事故死は、ほぼ三年半前の、二一年五月一九日であり、葉山嘉樹をして、一気加勢に筆を取らせたというには時間の隔たりがあり過ぎる。私は、前田河広一郎訳『ジヤングル』を一読したこと（もしくは前田河広一郎

からの翻訳作業前後の伝聞も含む）の衝撃、そこから肉体破砕の想が生まれたと考えたい。外国小説からの着想ということであれば、かつて私が初読後に抱いた違和感の相応の理由としても、頷くことが出来ると思う。

もちろん、小説の設定として、事故死した男の恋人である〈女工〉からの手紙、それを受け取る松戸与三の労働の日々と家庭の現実を描いたのは、まさしく葉山嘉樹の独創であろう。さらに労働者の過酷な労働現場における事故死というテーマには、村井庄吉の事件も念頭にあっただろうことは想像に難くない。その上で、私は「セメント樽の中の手紙」の肉体破砕の造型には、前田河広一郎訳『ジャングル』の読書体験が与ったと思うのである。

（姫路獨協大学教授）

注

① 『日本現代文学事典　作品篇』（明治書院　一九九四年六月）五一五頁。この小説のロマンチックな側面を、手紙形式に注目して論じたものに石川巧「『あなた』への誘惑――葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』論」（『山口国文　19』一九九六年三月）がある。

② 「『セメント樽の中の手紙』の一視点――教材として深めるために――」（『新国語研究　2』一九七七年五月）。

③ 「『セメント樽の中の手紙』の教材化」（『日本文学』一九七六年一二月）。その他にも、田中実「〈他者〉へ」（『日本文学』一九八八年七月）は〈女工〉の愛と連帯の訴えによって、〈職場と家との二重の閉塞状況にある〉与三が、いっそう自身を解体されていく状況を読み取っている。前田角蔵「『セメント樽の中の手紙』論」（『日本文学』一九八八年一〇月）は、〈女工の手紙〉との出会いを経由して、自閉的・自己中心的であった与三が、妻の言葉に出会い、改めて自己と自己周辺を直視しようとする事態に立ち至っていることが重要であるとする。内実は様々ながら、いずれも与三の変容に、小説の教育的効果を見出している。

④ 『国語教室　31』（大修館　一九八七年五月）。村井庄吉の事故死を「セメント樽の中の手紙」の題材とするものには、他に浦西和彦『セメント樽の中の手紙』をめぐって」（『国語通信　281』筑摩書房　一九八六年一月）、注①の石川巧の前掲論文があり、ほぼ定説となっている。

⑤ 日本評論社　一九三〇年一月。

⑥ 『日本文学研究　第七号』（大東文化大学　一九六八年二月）

⑦ “THE JUNGULE”と題して出版されたのは、一九〇六年で、管見するところ、ニューヨークの GROSSET & DUNLAP と DOUBLEDAY と JUNGLE PUBLISHING COMPANY の三社、ロンドンの HEINEMAN と WERNER LAURIE の二社から刊行されている。

⑧ 前田河広一郎訳『ジャングル』（叢文閣　一九二五年一二月）三頁。

⑨ ⑧に同じ。四頁。

⑩ ⑧に同じ。一頁。

⑪ ⑧に同じ。一頁。

⑫ ⑧に同じ。一頁。

⑬ UPTON SINCLAIR 刊行　一九二〇年　一一七頁。

⑭ ⑬に同じ。一四三頁。

⑮ ⑧に同じ。一五五～一五六頁。

⑯ ⑧に同じ。一八九頁。

⑰ 注④の浦西和彦の前掲論文。
⑱ 『文学時代』（一九三一年二月）。